

武州みたけ

第五十七号

「紅葉且つ散る」

令和四年大河ドラマの舞台は鎌倉時代です。当社とも縁の深い畠山重忠公が登場します。愛馬を担ぐ強力の印象とは一見異なる役者。果たして、如何描かれるのか。楽しみです。

(写真・文 服部朋也)

写真左から、三宅義信さん、宮本昌典選手
糸数陽一選手、稲垣英二さん



重量挙げ選手 必勝祈願

この度の東京オリンピックに出場された、六十一キロ級・糸数陽一選手、七十三キロ級・宮本昌典選手、一九六四年の東京五輪の「金メダル第一号」ほか数々の記録を樹立された三宅義信さん、コーチの稲垣英二さん。六月二十七日（日）にご来社され、オリンピック必勝祈願ならびに「夜神楽」をご覧になりました。



【訂正とお詫び】
『武州みたけ 第五十六号』「太々神楽奏上」の頁にて、「昨年（令和二年）は残念ながらコロナ禍において太々神楽を奏上することが出来ませんでした。」と誤って記載いたしました。ここに深くお詫びし、訂正させていただきます。

川崎市宮前区馬絹御嶽講

「太々神楽継続奏上百回」

令和二年十月二十九日、馬絹御嶽講の太々神楽奏上がございました。
馬絹講は代々毎年四月に太々神楽を奏上し続けて来られ、令和二年は継続百周年・百回目の記念の年。コロナ禍に伴う緊急事態により継続が危ぶまれましたが、延期を重ね役員六名のみのご参列にて奏上されました。心よりお祝い申し上げます。

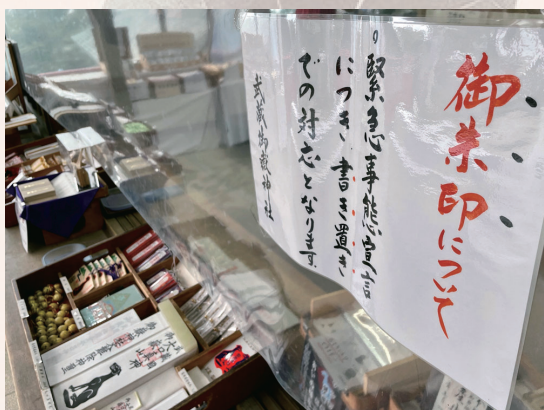
「コロナ禍」によせて

新型コロナウイルスによる、いわゆるコロナ禍がはじまり約二年。未曾有の事態に一度目の緊急事態宣言下では社務所を閉鎖。御師たちは講中の皆様へ御札を配り歩くことはもとより、お住まいの地域への移動さえも憚られるという状況に頭を悩ませ続けました。

ただ神社としては、人が集まることを忌避されるなかであってもご信心いただく皆様をお迎えしたい。ご祈願を望む方々をお止めしたくない。そもそも神社は緊急時にこそ開かれていなければならないのではないかと。試行錯誤を重ねながら、山内一丸となり感染症対策を講じてきました。

次から次へと状況が変わるなか、最前線で尽力いただく医療関係の皆様、生活に不可欠な業務に従事される皆様、感染防止に努められる皆様、そして当山を氣に掛け来山をご自粛いただきました講中・崇敬者をはじめとする皆様へ心より御礼申し上げます。御嶽大神様の御守護と皆様のお蔭で山内に感染者を出すことなく過ぎております。

ウイルスが消え去ることはないと思います。弱毒化し、お付き合ひしやすくなるまでにはまだまだ時間がかかります。マスクやカーテンに声を遮られながら消毒や検温をする日々は続きますが、自分に出来る範囲の対策を徹底していくことが第一です。良き方へ向かっていると信じ、引き続き皆で努めて参りましょう。神職一同、日々祈りを捧げ、勤めて参ります。



「身祓社」
みそぎしや

ケーブルカー 滝本駅近くの小川を渡す
禊橋を越えると、御岳山登山口には大きな
御嶽神社の鳥居があります。その右手に流
れる「竜頭の滝（禊の滝）」のほど近くに、
小さなお社があるのをご存知でしょうか。

この滝は、明治時代の社伝によれば「往
古ヨリ登山者ノ禊所トシテ滝アリシヲ享
保年ヨリ山下御師滝本坊再興シ」とあり
ます。御嶽神社は古くは修験道の修行場と
して発展しましたが、江戸時代に神社詣が
流行した際も、全国津々浦々から参拝者が
訪れました。

電車や車などない時代、徒歩や馬をひき
ながら何日も何週間もかけて御岳を目指し
た参拝者たちは、いざ山の麓に到着すると
神聖なお山に入る前にこの滝に打たれ、身
体を清めました。心も体も清めた参拝者は
最後の御坂を登り、宿坊の御師たちの手引
きを受けながら、宿願であった御嶽神社へ



の御参拝を果たすわけです。

その滝より向かって左に小さな
お社がございます。「身祓社」は
武蔵御嶽神社の境外末社として、
大禍日神、大直日神、伊豆触賣神、
速佐須良比賣神の四柱が祀られており
ます。

享保年間から何度か修繕はされてい
たようですが、滝のそばにあるため腐
朽が酷かったため、このたび修繕し社
殿をお取替し、六月十三日に祭典をお
こないました。

ケーブルカーを待つ間、滝の水で手
を清め、木漏れ日の揺れる身祓社にお
手を合わせながら、御嶽詣の歴史に思
いを馳せてみてはいかがでしょうか。

(文 権瀬宜 馬場慶太郎)

徒然ばなし

『何足の草鞋?!』



権瀬宜 久保田 享

私がこの山に帰ってきて早二十年が立ちました。神主と

して神社に奉仕し、家に帰ってはお客様をもてなし、観光協会の会議に参加し、
消防団員として人命救助を行う。そんな私は「何足の草鞋」を履いているのでし
うか。それは江戸時代より栄えたこの集落が、今現在も当時の生活を色濃く残し
ている事に理由があるのだと思います。

当時から御岳山の神職は「御師」と呼ばれ、各地に出向き配札や祈祷を行い、
来山した講や参拝者を泊め、お世話をするのが仕事です。（御師活動を今も継続
しているのは全国でも珍しく貴重です。）そして時には林業などその時代時代に
必要な様々な仕事をして生活を守ってきました。当時からすでに「何足の草鞋」
を履いていたのです。

山間の生活のため、すべて自分達で何とかしよう根性(?) が染みついている
のでしょう。町のように警察、消防・病院・コンビニすらありませんから。私
も先輩達の背中を見て育ちましたので、少なからずわかっているのですが、本
心では「なんでこんなにやる事が多いんだべ!」と若い頃には随分悩んだものです。
今ではすっかり諦めもつき、逆に誇りを持って仕事に向き合う日々となりました。
神社の立場から、観光の立場から、自治の立場から等々、これから先百年、いや
千年とこの御岳山を存続させる為の配慮を先輩達がし続けてきたように、私自身も
時代に合ったやり方で続けていきます。



時には神主、時には宿の主人。
消防団で救助したかと思えば、
はたまた観光協会のイベント、
野良仕事と早変わり。そんな「何
足もの草鞋」を履く山の生活を、
これから私の主観全開で少しず
つ、ご紹介したいと思います。

(次回へつづく...)



日本風俗史学会員
前青梅市文化財保護審議会会長
齋藤 愼

で、甲冑生産中心地の奈良甲冑師制作の標準的な当世具足です。この遺例を基準に、「金小札段威二枚胴具足」（以下御足）（以下御嶽具足）が当世具足の基本的構造と、調和のとれた装飾性も持つ甲

三、胴の各段は、韋紐で結びとめた伸縮不可能の横割の「立胴」または、一枚板を五分割し、縦割の立胴（雪の下胴・仙台胴）。共に内側には漆塗りの一枚草の浮張をはります。御嶽具足は横割ぎ立胴です。そして、立挙、長側は一段ずつ増え、前立挙三段、後立挙四段、長側五段。従って、胴は丈長（高）くなり、肩上は短めです。正面での胴丈は、35.7cm。肩上は16.2cm。肩上の表面は鉄板でかたく、胴部を吊り上げます。しかも首筋の防禦もかねて幅広く、ここに籠手の罫に重ねて袖も取り付ける籠手付の罫（韋鞆）も出て、当世具足の肩上の典型です。御嶽具足も、クレーンのように胴を吊り下げる堅固さです。その上、肩上の根もとの襟上、つけねが拡大した形です。小鱗や満智羅、立襟などという首回りの防具が取り付けられるので、少し年代が降ったかたちです。首回りの防具は、亀甲形鉄を縫い付け、韋につんだ防具で、隙間のない防禦をめざした当世具足構造を示しま

動機能發揮を考慮した構造です。この具足
を真正面からよく見てください。中世の大
鎧に無い当世具足の機能的な美しいかたち
です。背中には背骨を考慮した背撓せだめという
微妙な縦方向のくぼみをつくります。長側
五段目には人体の腰のくびれに添合わせた
外反そとむげが、左右に両脚の運動を考慮した剣込
が、そして背撓の末端の胴尻には、なんとと
尾骶骨の運動を配慮した剣込まで工作する
のです。当世具足の基本構造部分を小札で
はなく「鉄板」にしたから可能な造形なの
です。注目すべき具足の運動機能重視の構
造です。これらの造形の萌芽ほうがは、中世末期
の胴丸にも指摘できるのですが、当世具足
はこれを定型としたのです。御獄具足は外
からみても、よくそれがわかる定型着期
の当世具足です。生死をかけた戦闘の中で
の人体への配慮の行き届いた甲冑です。

五、草摺くさずりは御獄具足にみる六間五段が多
い。そして、軽い革板仕立という点が大切
です。五段の各段の下隅の角は丸く「小丸こまる」

仕立て、弓なりに横に反りつけます。各段の裏面には、細長い鉄板を弓なりにして、握みつけて、反りを固定します。足のさばきを考慮した点は、胴の胸部への考慮と同じです。そして胴に続く毛引糸である搖糸は長い。御嶽具足の場合9cmあります。中世の鎧や胴丸の搖糸は3cm程ですから随分長くなっています。胴を付けて、この搖糸の上から線縮の緒（緒所は胴丸と同じ）を強く締めると、胴が押しあがり、肩が肩から浮き気味になり、鉄肩上で立胴構造のため、胴尻の腰撓部分で肩にくる重さを受けて、肩への負担を減らすことになる。それに草摺は持ち上がってひらき、大腿部にまつわりにくくなる。肩先・腰の運動機能に配慮した当世具足の機能的構造です。その上に、上帯を締め刀を差すのです。そして草摺と袖の最下段の菱縫板は、畝目も菱縫も省略される。そのかわりに物にあたりやすい草摺の菱縫板には、熊毛をうえ、機能としては消音の効果と、全体の金小札に少し色彩効果を出しています。

六、当世具足で中世には無かった特徴として、肩上の襟まわりと同じく、防禦の完全を期して付属すべき「小具足」すなわち面頬、籠手、佩立（草摺りの間隙の防禦）、脛当を兜・鎧と、同時制作する点です。御嶽具足では面頬と脛当欠失。また袖と籠手を重ねて着装する構造で、胴の肩上に、かつての中世の胴丸にはなかった籠手付の罌（貴鞋）がつく。必ず籠手を付けるものだという構造を持つ点が重要な点です。御嶽具足の当世袖というかさねる籠手になじむ湾曲をもつ袖と、籠手と袖が共に金箔で彩色されている点、同一意匠である点も注目

です。「付属品共一式」が中世甲冑とは異なる当世具足の大事な特徴です。

さて、御嶽具足は、現在小具足の面頬が無く、類似のものを取り合わせています。面頬の垂は、白・啄木・紅糸（退色する）の段威、金箔の板物で、一見類似しますが、よくみると違っています。

七、御嶽具足は板物ですが、漆下地を厚みのある本物の小札のように盛り上げ、黒漆に仕上げて金箔を彩色、本小札より精巧な仕立てです。本物の小札のような経年による不揃いもないので、綺麗に小札頭が揃っています。毛引威色は萌葱系統の啄木糸と、紫色と段々に威した安土・桃山期の金小札色・威胴丸の名品を連想させる美しさを持つ当世具足です。

籠手は、四入という古来より用いられた鎖籠手で、肘金は八重菊、七耀文を五つ配し、手甲まで金箔を押しした華麗さです。残念ながら綴じ付けられた家地（布）は欠失ですが、裏は麻で芯は木綿で表地は平絹であることが「佩楯」の家地部分から想像できます。佩楯は四入に鍔金を加留多鉄（カルタ型の鉄板）の小鉄片を鎖で繋いだもので、やはり金箔を置いた鉄物で豪華な同一意匠です。なお膝を防禦する佩楯について、下半分の鉄板鎖つなぎの部分に接する「於女里」という横章に、縦に配した「力草」の左右共に、正平六年六月一日と文字を染め付けます。正平六年（一三五一）は南北朝時代の年代ですが、これは一種の商標で近世の章で「八代章」「御免章」ともいいます。（『装剣奇賞』）佩楯も籠手も鎖仕立てで金箔置きという点で、胴・兜・袖と同一意匠です。

八、当世具足の部分は、角はみな丸味があります。籠手と袖の冠板、草摺の菱縫板、鉄具廻りの輪郭、髀一段目小さな兜の吹返しみんな角が丸っこい。「小丸」仕立てです。兜の髀は、日根野髀、饅頭とならんで当世具足に多い「当世髀」ですが、その菱縫板は軽やかに曲面を作って外に反り出し、下縁の輪郭は、肩の袖の冠板の山形を受けて浅くなだらかに削り込む「肩摺り」という線です。美しい機能美です。類似の輪郭は、兜の鉢の正中板の下縁のうねりの曲線にもあります。なお、鉢の左右の腰巻板には鉄の角元を打ち（馬手側欠失）、角を左右に立てていたのです。面や眉底の裏が朱色塗りである点は当世具足の特徴です。

金彩色といえは、鉄具廻すなわち肩上、脇板、胸板の色どりです。これらはすべて黒漆仕上げ。草摺の菱縫板を黒毛にした感覚です。丸源氏打ちの緒の、当世具足の高紐を押付板から、途中を蟻結びにし、手先の孔から貴鞋を出す。肩上は、縁はなく、他の鉄具廻りは、縁を捻り返して覆輪に見せ、金泥で金の覆輪を彩色しています。とても優れた金彩色の使い方、覆輪は細く品良く、しまって見えるのです。

慶長末年代に定着した当世具足の基本的な様式を備えた御嶽の金小札段威二枚胴具足は、品格良い機能的な美しさでまとめ上げられています。しかし、多く目にする当世具足は年代の下つたもので、支配者となった武士が、その権威を具足に、行きすぎた装飾や、机上の空論による工作を取り付けて、武具としての評価に耐えないままして美意識の対象とはなり得ない存在になっ

てゆきます。そのきざしは、すでにこの具足の胸（立拳二段目）の左右の二つの菊座の鐙、弓手の「手拭付の鐙」と馬手の「采配付の鐙」（欠失）の付設にあらわれます。また鉄肩上の付け根が押付板と一体化し、さらに押付の上部、肩上の付け根が襟上状に広がる（襟まわり綴じ付けの余白）に年代の下降がみえます。しかし、（切付板）金小札段威二枚胴具足は初期の簡素な装飾で、過剰にならない実用の美を残している年代に制作された機能美を失わぬ、安土・桃山風の感覚で仕立上げに現存する数少ない遺例です。

ちなみに、大宮司金井家文書（目録Ⅲ・4・(2)―5）の神主・社僧・御師・惣代から、享保十九年（一七三四）寺社奉行井上河内守役人宛提出の「武州御嶽宝物覧」に「御具足 二領」「是者三十五年巳前辰年従常憲院様拝領仕候」とあります。すなわち、元禄十三年辰年（一七〇〇）五代將軍徳川綱吉の造営時、寄進の「御具足」二領が存在していたのです。

私は、この具足にその二領のうちにふさふさしい制作・年代・品格があると思います。四十五年余の昔、私が師事した日本甲冑研究の大斗、山上八郎先生は、旧宝物殿でこの具足を前に、このような「当世具足」を「寛永具足」と呼ぶと年代評価なさっていました。その翌年、昭和五二年（一九七〇）十一月三日に、市文化財に指定されたのです。私はその後、山上先生の高弟、山岸素夫先生に師事し、同門であった甲冑師西岡文夫氏が今回、緒所など、考証正しく、近世前期の当世具足を眼前に鑑賞、理解できる形姿に修理された事を感慨深く思います。

御嶽神社あれこれ

緋色の鎧

西岡千鶴

武州御嶽神社所蔵の国宝「赤糸威鎧」は甲冑の名称が表しているように赤い糸で組まれた組紐が鎧全体を覆っています。大部分は明治時代に行われた修理時に化学染料で染められた組紐で、色が褪せて紫がかった色に変わっています。が、部分的に残る本来の威糸は八百年以上経ているにも拘わらず濃く鮮やかな赤色をとめています。平安時代末期から鎌倉時代を通していくつかの赤糸威鎧が作られています。それらは例外なく鮮やかな赤色です。

平安時代に成立した『延喜式』には赤色を染める材料に茜、蘇芳、紅花が記されており、特に茜を用いた場合の色名に「深緋」「浅緋」という字をあてています。緋という字の中の非は羽が左右にぱつと開いた様を表し、そこから緋は目の覚めるような鮮やかな感じを与える糸や布の意になったといわれています。同じ赤色でも蘇芳、紅花は褪色しやすく、陽の光の下でも常に輝くような赤を発する茜染めにこそ緋の字をあてたのではないかと思われます。

茜は含まれる色素成分の違いにより、日本茜、西洋茜（原産地はベルシャ、インド）に分かれ、どちらも根に色素があります。日本茜はアカネ科の越年草で四枚の葉が放射状に開いて黄緑色の小花が咲き、秋には黒色の実が成り、棘があるので繁茂すると絡まりあつて雑草然としてきます。源氏物語や枕草子に八重葎とあるのがそれです。西洋茜は六葉茜とも呼ばれ、六枚の葉を持つています。



日本茜草

三十年ほど前までは茜で濃色に染めるのは非常に困難といわれており、当時、青梅市からの依頼を受けた赤糸威鎧の復元模造製作において、染色と組紐を担当していた私は、かなり失敗を重ねましたが、茜染に関するいくつかの論文に出会えた僥倖もあり、濃色に染めることが出来た時は心から安堵しました。当時の研究では西洋茜で染められた、と報告されており、私も西洋茜で染めましたが、そ



この日本茜染の威糸の平組紐には現存する他の甲冑には見られない特徴があります。袴、袖、胴の部位ごとに使われている平組紐の幅を変えていることです。また、紐の構造も特殊なものであることが判りました。

織物は経糸と緯糸が九十度の交差による組織ですが、組紐は糸が斜めに交わる組織なので、紐の表面はV字が並んでいるように見えます。Vを二畝と数えますと赤糸威鎧の袴は十畝、袖は十二畝、胴は十四畝になっています。畝数で幅の調整をしているのですが、この組紐の組織は全て二間と三間の混合組紐です。「間」は組紐独自の表現で、二間は一条の糸が二条の糸を越しつつ組まれていくことです。そして、二間三間混合組であることから「クテ打組紐技法」で組まれたことが分かります。また、赤糸威鎧には、ふんだんに使われている赤色を引き締めるように耳糸、畦目は紺、浅葱、白色の段柄の角組ですが、明治の修復時に付けられた耳糸や畦目は本来の紐とは構造が異なっています。残っている当初の耳糸は三六条、畦目は二六条で、いずれも現在広く行われている丸台と錘玉による技法（桃山時代〜江戸時代初期に導入される）では組むことが困難で、これもクテ打技法で組む方が理に叶い、また容易でもあります。

この組紐技法は古代から日本を含む世界各地で行われており、現代まで数か国で続けられています。わが国では一度滅んでしまいました。この技術は三十数年前に復元されましたが、少しでも当時と同じような紐を再現できるように精進しなければと思っています。



御岳ビジターセンター

ムサくんだより

「御岳山に暮らす守り神」

へビは昔から「守り神」と言われてきました。特に人の暮らしのそばで暮らすアオダイショウなどは、家にいるネズミを食べてくれることなどから家の守り神や神様の使いとして大切にされてきたと聞きます。

御岳山では本州に暮らす、アオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシ、ヒバカリ、ジムグリ、マムシ、タカチホヘビ、シロマダラの八種類のへビにすべて出会うことができます。

とはいえ基本的に神出鬼没です。なかなか狙って出会うことは難しいですが、御岳山に暮らす方々にお聞きすると「今日も畑にこんな（1m以上）大

きなアオダイショウがいたよー」「うちの庭の植木鉢をどけたらヤマカガシがいたー！」などなどいろんなところにへビと出会うチャンスがあるようです。

そんなへビ



たちは、主にアオダイショウはネズミや小鳥、ヤマカガシはカエル、タカチホヘビはミズミズなどそれぞれ偏食で好む獲物が違います。

出会う場所もロックガールデンなどの沢沿いではジムグリやヒバカリ、長尾平のような開けた場所ではアオダイショウやシマヘビ、登山道の道脇などではヤマカガシと種類ごとに好きな環境も違うようです。



ヒバカリ



ジムグリ

へビたちが暮らしてくためにはご飯となる獲物が暮らしていなければならず、個性豊かな八種類のへビに出会える御岳山はそれぞれのへビたちを育むための豊かな環境があるといえます。

あなたが出会ったへビはもしかしたら、この神宿る御岳山に暮らす守り神やその使いかもしれませんね。

本能的にへビが苦手な方もいらっしゃるかもしれませんが、へビたちは、こちらがちよっかいを出さなければ噛みついてくることはありませんので、ご安心ください。

みたけの重忠くん

作 たいやきジロー



敬神奉賛員募集のご案内

当社では、敬神奉賛員を募集しております。敬神奉賛員とは、御嶽大神の御神徳を敬い、皆様の心の拠りどころとして、また武蔵御嶽神社の更なる護持発展を目的に創設いたしました。奉賛員には例祭、祭典、行事のご案内のほか、新年に向けての御神札など各種の特典が受けられます。趣旨にご賛同いただき、ご入会下さいますようお願い申し上げます。

賛助費 五〇〇〇円

※詳しくは、社務所までご連絡下さい。

令和五年

大口真神式年祭

御奉賛のお願い

諸災退除の守護神である大口真神の御神徳を輝かして、世界の平和と安寧、そして講中崇敬者皆様の家内安全・商売繁盛・厄難消除を祈念する「大口真神式年祭」を令和五年に控え、修理事業および境内整備等を順次進めております。

皆様の深いご理解とご信仰を賜り、心からの御奉賛を仰ぎたくお願い申し上げます。

御奉賛 一口 二千元

神社の杜（五十七）

『ホンモンジゴケ（本門寺苔）』

片柳 茂生

今秘かにブームとなっている苔。苔むした庭園、溪流に佇む苔、苔が生えている空間は何故か人にゆとりを与えてくれる気がしてなりません。今回はそんな数ある苔の中で特異な性格を持つているホンモンジゴケについて、御岳山の苔の愛好家、元ビジターセーター解説員の井口さんのお力を借りてお話しします。

ホンモンジゴケの名前の由来は、東京の池上本門寺で初めて見つかったことからその名が付いています。この苔が武蔵御嶽神社の境内に彩りと柔らかな静寂さを醸し出しているのです。



他の苔たちは、重金属の成分が大の苦手というより大敵なのに、ホンモンジゴケは銅のあるところでないとき生きていけないという性質をもっています。苔同士は生存競争のはて、銅の近くで生きる場所をみつけたホンモンジゴケ。銅成分を体

に取り込み生きるすべを身に着けました。神社の銅葺きの屋根の下、銅の灯籠の足元、銅があれば、ホンモンジゴケはご機嫌。多少踏まれても、はがれても、気に入ったその場所は手ばなれません。

普通苔は子孫を増やすために、粉状の胞子を風に乘せて旅をさせ、その胞子は気に入った場所に着地できるとそこで成長して新しい生活を始めます。ところがホンモンジゴケは全く違う方法で子孫を増やします。この苔の胞子は日本ではほとんど見られませんが、ホンモンジゴケは自分の体の一部、つまりクローンで生育場所を広げていくのです。それではどうやってこの山の中に移り住



んだのでしょうか？

その昔、御岳参りの無事を祈念して、地元的神社に参った講の人々の足元は旅支度の草履。その神社にいたホンモンジゴケのクローンが草履の隙間に滑り込む。そして、御岳山までやってきた。たどり着いたそこには、立派な銅葺き屋根のお社が……。新天地をみつけたホンモンジゴケにとっては最高の幸せだったのではないだろうか。

これはあくまで想像にすぎませんが、静かに変わらず、神社の風景をより味わい深いものにしてきているホンモンジゴケは、今では神社の一部です。本殿の周りに敷き詰められた玉石の上、常磐堅磐社（旧本殿）、皇御孫命社の周りでの姿を見ることが出来ます。特に雨上がりは奇麗ですよ。ちっぽけな苔、けれど大きなドラマを参拝の折に感じてください。

あ と が き

まさに賛否両論の中開催された東京五輪とパラリンピック。日本選手の実績や入賞の数はかつてない多さとなりました。コロナ禍の中、自国有利な環境はあったかもしれませんが、選手たちが絶えず努力を積み重ねて得た結果であることは変わりません。また新種目では、皆で楽しみ、失敗しても「挑戦したこと自体を称えよう」という、国の隔たりのない新しい世界が垣間見えました。その一方で浮き彫りになった我が国の抱える問題については、これを機に反省し、良き方へ向かうことを願うばかりです。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方へご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様、厚く御礼申し上げます。また、西岡千鶴様、齋藤慎一先生玉稿を有難うございました。

令和三年 十月一日発行

〔年二回発行・非売品〕

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八（七）八五〇〇

FAX 〇四二八（七）九七四一

http://www.musashimatakejinja.jp/

印刷 (株)成和印刷

武蔵御嶽神社
公式SNS



facebook



instagram